

2025.10. 12 (日) 使徒27: 13～26

27:13 さて、穏やかな南風が吹いて来たので、人々は思いどおりになったと考え、錨を上げて、クレタの海岸に沿って航行した。

27:14 ところが、間もなくユーラクロンという暴風が陸から吹き降ろして来た。

27:15 船はそれに巻き込まれて、風に逆らって進むことができず、私たちは流されるままとなった。

27:16 しかし、カウダと呼ばれる小島の陰に入ったので、どうにかしっかりと小舟を引き寄せることができた。

27:17 そして小舟を船に引き上げ、船を補強するために綱で船体を巻いた。また、シルティスの浅瀬に乗り上げるのを恐れて、船具を降ろし、流されるに任せた。

27:18 私たちは暴風に激しく翻弄されていたので、翌日、人々は積荷を捨て始め、

27:19 三日目には、自分たちの手で船具を投げ捨てた。

27:20 太陽も星も見えない日が続く日も続き、暴風が激しく吹き荒れたので、私たちが助かる望みも今や完全に絶たれようとしていた。

27:21 長い間、だれも食べていなかったが、そのときパウロは彼らの中に立って言った。

「皆さん。あなたがたが私の言うことを聞き入れて、クレタから船出しないでいたら、こんな危害や損失を被らなくてすんだのです。

27:22 しかし今、あなたがたに勧めます。元気を出しなさい。あなたがたのうち、いのちを失う人は一人もありません。失われるのは船だけです。

27:23 昨夜、私の主で、私が仕えている神の御使いが私のそばに立って、

27:24 こう言ったのです。『恐れることはありません、パウロよ。あなたは必ずカエサルの前に立ちます。見なさい。神は同船している人たちを、みなあなたに与えておられます。』

27:25 ですから、皆さん、元気を出しなさい。私は神を信じています。私に語られたことは、そのとおりになるのです。

27:26 私たちは必ず、どこかの島に打ち上げられます。」

<説教>

使徒パウロはイタリア行きの船に乗せられて、地中海の真中にあるクレタ島の「良い港」と呼ばれる場所にいました。エルサレムでユダヤ人たちから訴えられたことから始まって、カイサリアにつれて行かれ、ついにはローマ皇帝カエサルの裁判を受けることになっていました。キリスト者としてはルカ、アリストアルコが同行し、その他、パウロを連行する百人隊長やその部下の兵士たち、また船長や船主もいて、乗船者数は合わせて267人でした(27:37)。地中海は既に「航海危険」期間に入っていました。パウロはそのまま「良い港」に留まるよう警告しました(9-10)が、他の多数意見は、そこを出てフェニクスという港に行って冬を過ごすことでした(12)。風が良ければ数時間で行ける距離でした。

そんなとき、ちょうど都合良く〈穏やかな南風が吹いて来たので、人々は思いどおりになったと考え、錨を上げて、クレタの海岸に沿って航行し〉ました(13)。

〈ところが、間もなくユーラクロンという暴風が陸から吹き降ろして来〉たのです(14)。船長たちもこのクレタ島の山から吹き下ろしてくる北東の暴風があり得ることは知ってい

たはずです。しかし、一時的な〈穏やかな南風〉を見て、「今日はユーラクロンはないだろう。出るなら今だ」と考えたのでしょう。〈船はそれに巻き込まれて、風に逆らって進むことができず、私たちは流されるままとなった〉とルカは記します(15)。

〈しかし、カウダと呼ばれる小島の陰に入ったので、どうにかしっかりと小舟を引き寄せることができ〉ました(16)。この〈小舟〉というのはおそらく非常時の避難用とかちよった人や荷物の移動のために普段から繋いで引っ張っていた船のことでしょう。海水が小舟一杯に入ってしまったので、それを〈船に引き上げ〉(17)るのも大変だったでしょう。〈シルティスの浅瀬〉は、クレタやカウダから南西に相当離れたアフリカ沿岸の湾(現代のスルト湾?)にありました。そんな遠くまで流されてしまう恐れがあったほどのひどい暴風でした。〈私たちは暴風に激しく翻弄されていたので、翌日、人々は積荷を捨て始め、三日目には、自分たちの手で船具を投げ捨て〉るほどになりました(17-18)。船が沈んでしまわないよう軽くするために、商品として大事な積荷を、そして船具までも海に投げ捨てなければならなくなった大変な状況でした。

そこまでして「いのちだけは何とか助かろう」と努力しました。しかし〈太陽も星も見えない日が何日も続き、暴風が激しく吹き荒れたので、私たちが助かる望みも今や完全に絶たれようとしてい〉ました(20)。文字通り「お先真っ暗」でした。〈私たち〉と書かれていることから、ルカやアリストアルコといったキリスト者たちまでもが絶望しかかっていました。

積荷を捨て、船具を投げ捨てるために何日も忙しく動いたにもかかわらず〈長い間、だれも食べて〉いませんでした(21)。船の揺れがあまりにも激しくて調理もできなかったのでしょうし、船酔いもひどかったかもしれません。そしてそういう体力的な問題と同時に、「それでも生きるためには何とか何かを食べなければならない」という気力も無くなっていったことなのでしょう。いわば肉体的にも弱り果て、精神的にも「死んだ」状態だったと言えるでしょう。ルカやアリストアルコでさえそうなっていました。しかしそんな中でパウロだけは希望を失いませんでした。希望を持ち続けていました。〈そのときパウロは彼らの中に立って言〉いました。「皆さん。あなたがたが私の言うことを聞き入れて、クレタから船出しないでいたら、こんな危害や損失を被らなくてすんだのです」(21)。これはここでは人々を責めるというよりは、彼ら自身が自分たちの失敗を思い起こし、自覚するための、そして続く「本論」である「勧め」を聞き、考え、気力を回復させるためのいわば「前置き」でした。そして勧めて言いました(22-26)。

〈元気を出しなさい〉(22)。これはヤコブ書 5:13 の訳では「喜びなさい」です。なぜ元気を出し、喜ぶべきかと言えば、「失うのはいのちではなく船だから」です。更には〈昨夜、私の主で、私が仕えている神の御使いが私のそばに立って、こう言った〉からです。神がパウロにみことばを語り聞かせてくださったからです。「恐れることはありません、パウロよ。あなたは必ずカエサルの前に立ちます。見なさい。神は同船している人たちを、みなあなたに与えておられます。」と神が言われたからです。パウロは必ずローマに行って皇帝の前に立つ、と主、神が保証してくださったのです。このローマ行きのきっかけとなったエルサレムでの騒ぎで兵営に入れられていた夜、主が彼のそばに立って「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことを証したように、ローマでも証しをしなければならない」と既に言っておられたのでした(23:11)。それ以前に既に第3回伝道

旅行の途中エペソでパウロは「私はそこに行ってから、ローマも見なければならない」と言いました(19:21)が、それも聖霊に示されてのことでした。パウロがカエサルの前に立つのは、いわば表向きは裁判のためですが、実質は主イエス・キリストを証しするためでした。それは迫害者だったパウロを召し、救い、イエスの証人として新しく造り変えてくださった主、神の限りなく大きな恵みの故でした。それ故にこれまでもパウロはあらゆる困難、いのちの危険の中を通されつつ、神によって守られ、助けられて来ました。ですから今度もこの暴風がどんなにひどくても、たとえ船は壊れて無くなっても、自分は途中で死ぬことはない、神が必ず生かしてくださると確信していました。パウロをご自分の証人としてローマに送る、遣わすという神、主のご計画があり、その計画の実現が中心でした。パウロと船に乗っている人々に関わることは全てその神のご計画の中にもありました。

この神に、主に自分は仕えていると、この神を知らない人々にパウロは証しました。この「仕える」ということばは「礼拝する」とも訳せます。この暴風の中で人々は船を失わないように、いのちも失わないように必死で働いていましたが、主なる神を礼拝してはいませんでした。パウロも積荷や船具を捨てるのを一緒に手伝いはしたでしょう。そして生身（なまみ）の人としては恐れを感じたかもしれません、しかし、たとえそうであっても、神を信じるそのたましいは、その信仰の目は神を、主イエス・キリストを仰ぎ、礼拝し、これまで受けた多くの恵みを思い起こし、神が自分にお語りになったことはそのとおりになったと感謝し、祈っていたに違いありません。それ故に、大多数の人々の目には「助かる望みも今や完全に絶たれようとしていた」と見えていたとしても、パウロ一人の目にはやはり望みが見え、元気、喜びがありました。

神はパウロをお用いになって、ともに乗船していた多くの人々に希望と喜びを与えようとなさいました。多くの人の中にたとえ少数でも（実際少数ですが）神を信じ、主イエス・キリストを信じる者が置かれ、神を、主イエス・キリストを証しし、差し示すことはとても大事なことです。私たちもそれぞれ神によって置かれている場では少数（多くの場合たった一人）で、「小さい」者ですが、与えられている責任は「大きい」のです。絶望ではなく希望を与えてくださる恵み深い神、主イエス・キリストを証しして行きましょう。